令 和 5 年 3 月

大学院文学研究科

川名　禎　提出　学位申請論文
『城下空間の再編と近世都市の形成原理』
審査報告書

國　學　院　大　學

川名　禎　提出　学位申請論文（論文博士）

『城下空間の再編と近世都市の形成原理』審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、近世における代表的な都市類型である城下町を対象に、その成立と展開及び空間的特質の分析を通じて、近世都市の形成原理を明らかにしたものである。従来の地理学における近世都市研究の課題を見据え、戦国期から近世初期にかけて成立する城下空間の実態と形成過程を解明し、さらに近世城下町に内包された形成原理とその都市構造について論じた。また、従来の近世都市における空間研究が、いわば権力による都市の建造空間を主たる対象としていたのに対して、本論文では住民の視点を取り入れ、住民が織りなす生活空間の構造についても考察することで、ハードとソフトの両面から近世都市を捉えることが可能となった。

本論文は大きく三部にわけて構成されている。第Ⅰ部では戦国期の城下の構造と近世城下町の成立を論じ、第Ⅱ部では近世城下町の地域構成や都市構造を、近世社会の合理性や形成原理をもとに論じた。第Ⅲ部では、都市住民の生活によって生起される様々な出来事や住民の行動の分析を通じ、近世都市の生活空間について論じている。また、近代の時代小説を分析し、江戸の場所イメージを考察した。

序章では、戦前から現在に至るまでの近世都市空間に関する研究の流

れを概観し、それらを整理した上で、問題の所在と本論文の分析視角を提示した。とりわけ、近世城下町の成立に関しては、戦国期の城下が何を達成し、どの部分が近世城下町へ継承され、どの部分が変質していったのか、という点について改めて検討する必要がある。そして、士庶別居の原則に代表される近世城下町の「身分制都市」としての理解についても、新たな見直しが必要になってきている。従来強調されることの多かった階級的身分の序列性に基づく城下町の地域構成については、都市生活上の機能性の面から改めて評価をしなければならない。これらを検討するにあたって、城下町を都市プランとしてだけではなく、地域として捉えることが重要であると指摘した。

序章の付論「『城下町』用語とその概念の変遷」では、「城下町」用語の意味内容について検討した。近世における「城下町」は、城下の町人地を表す用語であり、城下の町役を負担する町という意味を内包していた。近代になると、武家地や町人地の区別が撤廃され、「城下町」はそれらを含む一体的な都市として捉えられるようになる。戦前・戦後の都市研究における「城下町」用語の使用例を検討した結果、三つの「城下町」概念の存在が明らかになった。とりわけ市制施行以後、近代都市の一類型として「旧城下町」ないし「城下町」が使用されるようになり、近世城下町に対する理解も、近代における一体的都市としての概念が強く反映されるところとなった。そうした点からも城下空間の解明にあたっては実態に即した分析が必要であり、今後の城下町研究における地域論的な理解の重要性を指摘した。

第Ⅰ部「戦国期から近世初期における城下空間の形成」では、主に常陸国結城を事例として、戦国期における城下空間の実態と近世城下町の成立過程について考察を加えた。特に近世城下町においても本質的な意義を有する住民の「役」に注目して、戦国期の城下を捉えた点に特色がある。城下の機能及び空間的な範囲を、城の維持管理に関わる労働力編成と捉えることで、「城郷」という新たな概念を提示した。また、結城の近世城下町化のプロセスを分析し、近世初期における結城城下町の到達点と、廃城後に近世都市として改造された景観を明らかにした。

第１章「『結城氏新法度』にみる戦国期の結城について」では、『結城氏新法度』に記載された結城城を取り巻く町や地域の在り方を分析し、役負担によって結びつく地域の実態を明らかにした。『結城氏新法度』には「城下」の表現はみられないものの、「膝の下」あるいは「手許」と呼ばれる領域の概念がみられる。これは「城下」に似て、役負担などの労働力編成によって城と強く結びついた地域と考えられ、「城郷」と捉えることを提案した。また、『結城氏新法度』から「町」の性格、景観、機能について考察し、商業的機能よりも役負担を介して城と強く結びつき、防御の一端を担う町の機能を明らかにした。さらに、近世初期における結城本郷の成立とその領域について考察を行い、藩政村としては特殊な性格を明らかにした。結城本郷は、結城城を中心とした一村多集落型の広大な行政村であったが、この特殊性は中世以来の領域を継承する地域（城郷）の存在を裏付けるものであったと考えられる。

第２章「近世結城城下町の形成」では、結城秀康によって整備された

といわれる近世結城城下町の建設の実態について分析を行った。結城町は秀康入部直前の段階においてある程度の成熟をみていたと推定できるが、秀康が行ったとされる城下町建設に関して、武家屋敷地区の形成、「御朱印堀」による地域区分、寺社区域の形成、という３点から検討した結果、武家屋敷地区は未だ建設段階のまま転封になったと考えられること、「御朱印堀」の形成は秀康転封後の可能性が高く、地域区分線としての機能も成立時期の違いを考慮する必要があること、さらに寺社区域も秀康転封後に他所からの移転により形成された可能性が高いことなどを明らかにした。以上を踏まえ、結城秀康による結城城下町建設は完成には到っておらず、その後の代官支配時代を経て近世結城町が形成されたことを論証した。

第３章「戦国期小田原の地域と景観」は、近世の地誌書に記された小田原の地名や現存地割などを手がかりに、戦国期小田原の地域と景観について論じた。前半は、『新編相模國風土記稿』に記載された小田原城下の地名を、①「宿」地名、②北条氏家臣などの人物名に因んだ地名、③職業や集団の特徴を表す地名、④ランドマークを地名としたもの、⑤その他の地名、の五つに分類し、その分布を検討した。戦国期に由来する地名は城郭周辺に集中しており、特に「宿」地名や職業を表す地名は街道に沿った松原明神の周辺に集中していたのに対し、人物名を冠した地名はこれらの地区を挟むように南北にわかれて分布していた。前者は町場、後者は家臣屋敷が卓越する地区と推定できる。後半では、小田原の地割に残る２種類の軸線の存在を明らかにし、小田原城の拡張に伴い、

街道の軸線が変化したことを明らかにした。そして、戦国期の小田原が、街路の交点にあたる笹森明神を中心とする構造を有していたことを指摘した。

第Ⅱ部「近世都市の合理性と地域構成」では、近世都市を代表する城下町の形成原理について考察を行ない、城下町が役負担によって城と結びついている点を改めて確認した上で、城下町の地域構成上、合理的で機能的な居住者立地が認められることなどについて明らかにした。ここでは権力者の都市として城下町がもつ防衛、階級、支配、管理といった政治的束縛に隠れ、見落とされがちな都市の合理性に注目することで、従来の身分階級の序列性による理解とは異なる視点を提示している。それは城下町の空間や景観を読み解く新たな視点であるといえる。

第４章「分散城下町の成立とその統合原理―下総国関宿城下町の復原を通じて―」では、城下町関宿を対象として、城下町の成立と形態の特徴、各町の機能や全体構造、形成原理などを明らかにした。近世関宿城下町は、戦国期の城下を継承した経緯もあって、分散的な形態を特徴としており、２枚の絵図の分析からは、武家地がもつ城への求心性と町人地の分散性という二元的な傾向がうかがわれた。城下各町の機能的要素には、領主需要に応じた商業機能、河港機能、宿場機能、農村機能などが存在し、そうした機能は各町の立地環境と密接に関係していた。そのため各町の機能はその場所と不可分な関係となり、分散性の解消を妨げた。こうした関宿城下町の分散的性格は、城と町とが役負担により結びつく政治的相互依存関係により成り立っていることを示すものといえる。

第５章「久世氏入部期における関宿城総構内の屋敷配置と空間構成―『世喜宿城之図』の検討を通じて―」では、関宿城下町の武家地について注目し、久世氏入部期の家臣屋敷の配置から、近世前期における関宿城の空間構成について考察を行った。近世前期の関宿城を描いた「世喜宿城之図」の史料吟味を行い、絵図の記載が久世氏入部期における家臣配置の実態を表すものと判断した上で、分析を行った。その結果、従来指摘されてきたような身分階級による序列性の原理はみられず、むしろ役職に応じた機能的な屋敷配置がなされていることを明らかにした。また、兵学の思想には本来合理性・実用性を重視する側面があったと考えられることから、近世城下町の武家地を分析する上でもそうした機能面からの評価が重要であることを指摘した。

第６章「二王座村絵図にみる臼杵城下の景観と地域構成」は、豊後国臼杵城下町を対象として、臼杵城下の地域構成の特色及び地域形成の原理などについて論じている。分析にあたっては、臼杵城下の一部を構成する二王座村の絵図を用いて、その詳細な景観描写や土地利用表現などを元に、城下の実態を明らかにした。城下の拡大により実質的な城下としての土地利用をもつようになった二王座村は、武士や町人、百姓などが混住する地域を形成した。しかし、居住者の職業などの違いにより、城に対して求心的な立地と離心的な立地とがみられ、住民の属性に対応した機能的な居住者立地の実態を確認することができた。このような地域制の不分明な状態に対し、臼杵藩の天保改革では衣服や建築に制限を設けることによって、身分制の秩序を維持する政策を実施した。本来、

近世城下町は空間的な地域区分が明瞭であるが、臼杵城下では建築基準を用いた地域制の存在を指摘することができる。

第７章「近世関東における『時の鐘』について」は、関東における「時の鐘」の所在を明らかにし、その成立時期や立地、経営方法などについて検討したものである。戦国期に陣鐘や城鐘として利用されてきた鐘は、元和期頃から時報としての役割を担うようになった。その後寛文・延宝期に時の鐘の鋳造が増加し、この期間に時間観念の拡大があったものと推測できる。当初は城内にあった鐘も、次第に大手門周辺や城下へと移転するようになり、時報の共有が城下全体に広がっていった。一方で、城内では太鼓を用いた時報を採用するところも多く、城と町との二元化も確認できた。さらに、城下町と非城下町にわけて時の鐘の成立時期を比較した結果、城下町において先行する傾向がみられ、城下町の先進性が確認された。

第Ⅱ部付論「笠間稲荷神社所蔵の関宿城絵図について」は、関宿城下町の地域構成を検討する際に用いた絵図の史料批判と、関連資料の紹介を行ったものである。笠間稲荷神社には、笠間藩牧野家文書が保管されており、そのなかに関宿在城時代の絵図が数点存在する。とりわけ、「関宿城之図」と記された城下絵図は、関宿城及び城下の景観を詳細に描いた絵図であり、これを検討した結果、17 世紀後半という景観年代や詳細な実測図としての性格が明らかになった。本図は公用図として関宿藩が作成したものと考えられるが、その作成契機として元禄国絵図事業があった可能性を指摘した。

第Ⅲ部「都市住民と生活空間の構造」では、都市の住民に注目することで、景観やプランだけではわからない都市空間のもう一つの側面について論じている。都市は支配者からの要請と住民からの要請によってその空間を形成するといえるが、従来の研究ではその視点が前者に偏り過ぎていたきらいがあった。そこで、住民の行動や都市で起こる様々な出来事を分析することで、為政者が造り出す建造空間とは異なる城下町住民の生活空間を明らかにした。一方、第 10 章及び第 11 章では、小説を用いて場所イメージの分析を行っており、イメージされた都市空間を構造的に捉える新しい試みとして第Ⅲ部に加えた。

第 8 章「『町方以後留』にみる城下町津山の空間構造」では、美作国津山を事例に、町方の公用日記を抜き書きした『町方以後留』を用いて、文化年間の津山城下で起こる様々な出来事を抽出し、それを通じて多様な空間構造の検出を試みた。景観から明らかになる津山城下の象徴的な南北構造に対して、住民の生活や認識は東西軸を中心としたものであった。さらに、興行場所にみる領域構造や時間によって変化する中心・周辺の構造などをも明らかにした。また、武家地や町人地といった地域制を越えて移動する住民の実態や、そうした行動が地域を変えていく過程を示した。

第 9 章「幕末期江戸藩邸を取り巻く勤番武士の行動空間―紀州和歌山藩士酒井伴四郎の日記を事例として―」では、江戸勤番の下級武士である酒井伴四郎の日記の分析から、幕末の江戸における個人の行動が織りなす日常の生活空間の構造について論じた。酒井の生活空間は、自身が

居住する赤坂藩邸を中心とした日常活動空間と、主に寺社参詣や物見遊山などの行楽に出かける日常行楽空間とによって構成されていた。前者は日常必需品の購買圏として捉えられ、比較的近隣であるのに対し、後者は江戸全体にわたり、概ね半日の行程で往復できる範囲であった。酒井の生活空間は、日常活動空間とそれを含む日常生活空間、そして非日常生活空間の三圏構造をなしていたことが明らかになった。

第 10 章「『半七捕物帳』にみる岡本綺堂の江戸情報」と第 11 章「『半七捕物帳』にみる江戸の場所イメージ―岡本綺堂が描く江戸の地域―」は、それまでのリアル・ワールドにおける分析に対し、イマジンド・ワールドを対象に近世都市を捉える試みであり、岡本綺堂の時代小説である『半七捕物帳』を題材に、岡本綺堂が描いた江戸について分析を行った。第 10 章では、『半七捕物帳』を執筆するに到った経緯や、綺堂の江戸に関する知識及びその情報源について論じた。綺堂は当初探偵小説としてこの作品を書いていたが、リアリティを求める必要から、次第に江戸の面影を描くことに執着するようになった。そうした綺堂の江戸情報は、主に芝居を中心としつつ、『武江年表』をはじめとした各種の文献や体験談、自身の実体験などによっていたが、いずれにしても幕末から明治にかけての情報が作品に反映されていたことが明らかになった。

第 11 章「『半七捕物帳』にみる江戸の場所イメージ―岡本綺堂が描く江戸の地域―」では、作品に描かれた江戸の全体及びその構成要素たる諸地域を対象に、綺堂のもつ江戸の場所イメージを考察した。その結果、作品中にみられる三つの「江戸」の用法から、綺堂の静態的な「江

戸」のイメージが明らかになった。また、作品に描かれた場所のイメージには、中心と周辺、山の手と下町、武家地と町人地、「騒」と「静」、「開」と「閉」、さらには自然と文化という二項対立の単純な構造が内在しており、それらは物語の展開を導く役割を果たしているものと解釈できた。

終章「城下町から近世都市へ」では、本論文の成果を整理しながら、現在の到達点と今後の展開の見通しや課題について述べた。戦国期から城と城下とは役を通じて結びついており、やがてそれが城下町の原理として近世城下町に継承されていった。役負担を媒介とする政治的相互依存関係の仕組みは、やがて宿場町などの他の近世都市においても導入されていったため、近世都市はいわば城下町化することで成立した都市であると捉えることができる。また、城下町における城と町との二極化は、武士と町人という本来的な二元的構造を鮮明にしていったが、城下町の二元的構造の一方にあたる町人地（本来の「城下町」）は、他の近世都市と共通する性格をもっている。しかし、城下町の二元的な性格も、江戸などの大都市においては、多極化や一体的都市化の進行により次第に解消していく兆しをみせていた。そこに江戸の先進性と近代都市への萌芽をみることができる。

論文審査の結果の要旨

歴史地理学はその黎明期より都市や集落の景観プラン研究に大きな成果を挙げ、歴史研究の一分野としての地歩を固めてきた。城下町研究もまた、小野均氏以来の長い研究史のなかで、防御的性格や身分制的地域制といった属性をもつ「城下町プラン」のパラダイムが構築されてきた。本論文の著者、川名禎氏はこうした研究史とパラダイムに正面から向き合い、為政者側によって設定された武家地・町人地の空間的隔離という景観的な制約を超えて、城下住民が享受していた生活空間の構造を解明しようと試みてきた。序章から終章までの 13 の章と 2 つの付論からなる本論文は、著者の意欲的な研究を 3 部に再構成したものであり、着実な実証的姿勢に貫かれた多くの新知見が盛り込まれており、学界に裨益するところきわめて大である。

序章で著者は、「城下町」研究史を総括しつつ、その概念が城、武家地、町人地、寺社地などを包括する「一体的」都市を指す用語に転じたのは、近代的な都市概念の影響によること、その結果本来多様な存在形態を許容すべき「城下」が「一体的」都市とイメージされる弊害を生ぜしめたことを確認する。

「戦国期城下町」論の再検討を主とする第Ⅰ部では、城と町場が分離した戦国期の「城下空間」に対し、役負担と特権付与という政治的相互依存関係によって城と結ばれた「城郷」の概念を提起した。近世史学の基本概念である役論を巧みに取り込んで、「城下」の設定が都市建設で

はなく、第一義的に城郭維持のための労働力編成にある、とする著者の見解は蓋し卓見である。常陸国結城の事例研究（第 1、2 章）では、「結城氏新法度」の緻密な史料解釈や、その後の秀康入部期、幕府代官伊奈氏支配期における城下町プラン展開の復元も鮮やかで、高い説得力をもつものといえる。

中近世移行期における「城下空間」の再編を通じて、近世初期には本格的な城下町建設が実現し、城郭を核とする求心構造の城下町プランが現出する。しかし、著者は「特殊とみられてきた中にこそ近世城下町のもつ本質が存在」（77 頁）するという期待の下に、関宿や臼杵といった明らかに変則的な小城下町の事例を用いて、その本質の抽出を試みた。分散的な複数の町場が城下に編成された関宿では、役負担を介した城と町との結びつきを確認したうえで、以後の都市的発展が、城（武家地）と町との二極対立構造に収斂することを明らかにした（第 4 章）。この二極にはいずれも機能的な配置が優先されており、著者はそこに身分制秩序とは異なるもう一つの原理、すなわち「近世的合理性」の原理を見出した。「近世的合理性」とは、身分制をも含む近世社会の基本理念に起因する制約の下で、日常生活の利便や経済効率を志向するベクトルを指す。上述の政治的相互依存関係に加え、こうした近世的合理化のベクトルをもって、非城下町を含めた近世都市一般の形成原理と評価する著者の見解は、オリジナリティに富む創見と評価できる。

城下住民の行動空間や場所イメージを扱った第Ⅲ部で、著者は、景観プラン上では強固な枠組をなす身分制的地域制も、現実の城下住民の行

動空間では、さしたるバリアとはならなかったことを強調する。津山城下町の事例（第８章）は、士分の長屋建設が士庶混住状況を作り出した事例など、住民の地域認識や行動が身分の制約を超えて、合理化を志向していたことを明証する秀逸な論考となった。江戸詰の紀州藩士、酒井伴四郎の日常的な生活空間を論じた第９章においても、江戸という巨大都市の住民は、身分に関わりなく、消費生活や行楽の空間を共有していたことが確認された。城下町プランにおける身分制的地域制という原則の脆弱性は、本論文に一貫した著者の主張に他ならないが、場所論や行動論を通じてこれを描こうと試みた第Ⅲ部もまた、本論文の注目すべき成果である。

以上、本論文の評価すべき達成点について概述してきたが、全般的に史資料の分析は緻密であり、景観復元などの歴史地理学的基礎作業も的確さを失わない。論旨の展開も概ね明解で、十分な説得力をもつものと高く評価できる。

もとより、本論文にもいくつかの看過しえない課題が残されている。城下町の中心機能は「所領」の空間的な広がりと不可分の関係にある。したがって、城下町の立地や規模・形態と藩領域（一円知行／所領錯綜）との関係、とりわけ「城付地」の広がりの違いが城下空間のあり方にどのような影響を与えたのか、城下町をいくつかの類型に分けた分析が求められよう。また、景観を主たる素材とする第Ⅰ部、第Ⅱ部の高い完成度に比して、生活空間を論じた第Ⅲ部のいくつかの章には、行論上さらに洗練の余地が残されている。とりわけ、生活空間と身分秩序との

かかわりについても、さらに多くの事例を通じて、考察されるべきであろう。

しかし、これらの課題はすでに著者、川名氏の良く理解するところであり、いずれ近い将来にさらなる考察の深化が期待されるところである。

以上の所見により、本論文の著者、川名禎氏は、博士（歴史学）の学位を授与される資格を十分に備えていることを認定するものである。

令和５年３月９日

主査　國學院大學教授　　吉田敏弘　㊞

副査　國學院大學教授　　林　和生　㊞

副査　國學院大學教授　　吉岡　孝　㊞

副査　立正大学教授　　岡村　治　㊞